毎年は年越しの年は殺生禁断の年なれば、いつも多忙がるまいは けがを位まてはなる
事上りもすみかの中は
去年八月附はる年賀毎へのは昨年折かり多かりしに
又他の炭のうた五月テイテイには批評なく神に対有る
馬鹿位とは松炭コヤ横くぬす炭ヤヤ炭の用るものは一俵
二俵コヤし炭屋の五俵と俵とる寄せ申い 炭屋かれつて来
て五寒位へ横て置きたるけーまえ ヤレ寄りかどうの張のまい
からば横むが適当だたでは 相撲の猟断なり
炭やく人の猟なれ思へる 炭をやいて人の猟の如く思つた猟
の在であるとふ上なり コイツモ 二三の句を寄りこと寄ど
を寄りとふものがわるいのかーらん 悪い悪まわるく変える

のかーらん
炭やを山へ入らずを立てい 京か例の猟断で中すきて
ゆるこしい 年中流のうりを舞おーて又たのた
背と二人連立つて 敵もからかで コノ山中へまげて来し又
たものい 夕の暮すもなかけれは食ふもこまるに依て初めは
不則で有つた 炭やヤヤ男をやつて夕間に今ではあて炭
やらーく成つてもあれてはなるまい かから手足を見
ると昔のやヤ男の叫が(●やヤ味あるかーかば) やヤ男でふーて
いい 昔の宿あを思ひたーーては心ひそかに泣かんる
といつた様たわけ
炭やヤ(スミヤヤジン)に山へ入れーと炭やくと言ヲ様ナ様極に行ヲタウドウカ
思つ勾法に於ては多の成功し居ラ又云こ 例の猟断モコ、に至

つて驚かすると得たい様思ひ 次ヲ五月の歌物年ヲ

つて驚かすると得たい様思ひます　次ぎに五番の歌物語は
失恋ノ定ノ会ヲ開イタ三十二、三年以ノ頃ふがアル様思つた、
時代後レノ点ガ有ル様思つた
コレハ又意外の出来栄　三十二、三年以の頃よモ交つてゐるあるし
ルヰヤアソコガ即ち使ひ方もアモ知レ又出レコノ五番のうた全
体ヲ見テ三十二、三年以前ニと云ふに至つては其の肌の付け
方を疑ひたくなる　大体
訂年寄迄失敗の作ばかり　今更云譯はやめまして次へ
失敗の歌集を選びて選ばれた歌ばかりついて君
か意見を書くとしまはエライヅ　の冷評ヲ大
ち立腹こい成程之理ありまする訳も申ーたるは
そしいさかエライヅ　と申たるまい　書ふ失意の

四つのびきに於ける山の考の所の批評を見たる迄
かわとアノ坪を見ることズイブン思ひ違ひたるを云ふ
てゐる由来犯岸流は自我流の猫断流とる評あ
ると云ふ　アルガ　猫断をやつてゐる人か是ガ
とひつかたしも成り申い　勝の底ある　ぬに冷評し
た訳ではかり　同人四五六人ヲ通すめ者が今更冷評
し今ヲ云ていやる伸ろわかをまず存ずるかかつても
敵失由の遺志をつく為つは出るかもし矢ければソ
ンナ事ではないのでや一場の馬鹿口と思ひたい　僕が
わるかつたと言ひます
君の言のうたを重作でない点を言ひすぎたが一か
僕の所謂重作と思ぬ様に感じたのは前の三首あま
りにつまらなさ故一寸か思ひたるわけ

天生重作とふり石前が浦下た様ま僕かな処で

疑やすに山へ入れずして先ず技ナ技梅、行、ダウドウガ
思フ句法に於ては多の成功シテ居ラ又云ヒ　例の猫断モヨ、に至

天生連作と云ふ事花菊が浦下した様な僅かな処で
変化して前は花衣が紅の花で
あるべきを[illegible]が讀者の頭へひびかぬ故に云ふたそして仲に一種
あると思ひ居れば一寸連作でないと云ひたるわけ之
[illegible] 新潟の子 十三吟味したる連作を示すと
以前説し書げたらふと思ふが ソンナヨを云ひ合つた
処で新さうだ 又ひまし[illegible]なる故コンナヨは面白く
ゆつりて
ゆゆべるゆゆとかかんと[illegible]下た処用ゐ出す 夕朝
敏為の カヂカンダを[illegible]を[illegible]して化ける
が木[illegible]かまけば[illegible] 夕方神全を用さ
[illegible]のしは[illegible]の妻と[illegible]下てかく[illegible]書[illegible]
又中失敗な処信[illegible]しつし[illegible]事なさけり

[illegible]とまりたるか 地も葉もないた旦云ふ木
[illegible]とめなれ[illegible]下し

芋の江の弱

[illegible]

二心 表のうたの[illegible]は不服の場所もあるとに角
佐のうたとよく見てもらふ
[illegible]の意体は[illegible]見ただけである様[illegible]
の[illegible]ひ[illegible]かアレハ大に[illegible]意
[illegible]ねえ[illegible]
[illegible]月二月は[illegible]

[illegible]は([illegible])又[illegible]

沈小海苔之

毎々御書に接し別有まゐらせ、扨て御仕い狂歌ナ首のほか仕に就て申上ぞねたかいとの事、何とかる事もかなはぬ失礼ほどの、しかし時々ひまは有しいとも、ひまさへ来れば御カ子のクメンに出掛けるか仕事まで出かけるかまい、しかし筆は九つまりねためるはせう事が向けば改面してやるまは今年に入りて六七回有しかナロる一通つゝは奇妙にも、徹夜する暇まい、今

本郷三丁目

七月廿

二伸 夫のうたの方評ナしは不服の場所あるとに角佐のうたとよく見て居ます見たばかりで居ます司馬の書体は当見たまいしかアレハ大に御意のつまりなり ひまがあったらば伸たのも只の狂体しかしゆゑ〳〵ねえしも申さる

十月二月は家下居賀 居なり 円 板が行ったら

皆は(橋本)又〳〵 沢山海苔之

本郷三丁目

下総石下駅在岡田村

長塚節様

八

二月五日朝

東京市本郷区

[illegible]

毎々御書に接し難有きねい、お前さまより本年の初刷にて拝領仕い狂体ナ首のはゞに就て申かいへとの事、何とか申上ぐねばかいへとも、それかはらぬの貧乏ひまなしあて筆と云事もかなはげど矢れは居ゝ、しかし時々ひまは有しいへとも、ひまさへ矢ればお力子のクメンに出掛けるか仕ま事まて出かけるかまい、しかし筆は九つまりおためゝはせく筆が向けば改通しでやるまは今年に入りて六七回有しかナロる一遍つゝは奇妙にも、徹夜すら幅まい、今改も、大分おそくなるべしい、少しばかりのもの送して一すは酒を五ー上つて、執筆をよんで九時すぎまりかりかへしよみかへし申い、お次こ申上べくい、と前置

澤山に、丁度原の狂体ナ首の序見た様にいらぬまオフト失礼コしはいもの序のまにいるまみまて一すぬ風ゝ狂体ナ首は昨年のは作の中は作は寸しいやもーは試みなされ以外ゝ寸なかゝら体のは作はまいは、寸とくらべたらば……とも思ひ居ゝ　つまり元はまね見以上のまは、たゞやたらに面白くやたらにうれしくよくばんな見度よやつたもンダとばかり……感心して御年の度も申さんに数を去さえて差上い訳まい、しかし今ね見すると……何が面白かつたンダロウとくりかへすと格別数がよかつたのでは寸し、人の目先をかへたやり方が馬鹿に寸まに入つて面白しうれしくも感じたる訳とれなり申い　しかしなぶら格別数がよかつたのでは無いとは云ふもの、今の俳句人間でこんなまを

やられいは居をのけてはのを……の外まは無之いとひそかに自慢は居ゝ

じたる訳とおもひ事い しかしなおら格別教かよかつた
のでは無い と云ふもの、今の我等同人向でこんなすを

やられいは君をのけてはの……の外は無えいとひ
そかに自慢は成て

君は常つてこんなすを云ふた事がある様覚えた先生が
いはるいのに秀七はよく三文四文の様な言葉を用ゐるが
よくない事である　三文四文と様な詞は長敷でもむし短
かい物とか又三文四文八文九文とかいふ様なものゝみで
すとめる位でなくてはならぬと君は之を布衍して云はら
ゝには　つまり五七五七とやつていつて向に三文や四文の
様な言葉が有るとひどく耳さはりに成る為で有る事実よ
くない事だと思ふと　成程それはそうで有る　しかし
それを云いた時は　何だか股が立つてかなはんだと様に
覚えた　つまり左千夫君や其他の諸君見た様にいつも
くれし書らば調子は五七五七五七五七で長敷をやられ

たりするは已に既に長敷の調子といふ物が陳腐になつて仕
舞ふて長敷と事た日まやアテンデ通んでみる気もしなか
つた位で有らいそな何とかしたい物だと思へばさそ、や
つと[redacted]みさよ、みこもろみふくしもよ、みふぐしもさ
の異例をのみを等まして（つまり諸君が知つてゐるやう
三四文六八文をつかつたものゝ、之を先生迄がそんなる
をいふとは宜ケーから〜事と思ひいな上の叫は股し立
ちたる訳ない　思しなおら〜とた
ての方面から考へて見ると先生は面と向つて其人の関点
を云はるゝ時は必ず其場まおない人を引ぱり出して[illegible]
はいかぬあの男のやり方は[illegible]だから君もそんなすは
やらぬがいいと様にやられそしてだしまつかれた男
の事をいふのかと思ふとそうぢやない――つまり面と

（松魚節がばりのだつから）

向つて云ふ人をひどく云[illegible]に他を云ふ等法で有つたす
近来[illegible]より思ひ当るふしゝ多く有るし先生の小生

（ふ代り）

向つて言ふ人をひどく言ふ（ふけり）に他を言ふ筆法で有つたり
近来ニ至り思ひ当るふしゝ多く有しい。先生の小生
を評せる数語まことに名言と存ぜらるゝ。
さまに云はれいるとおもひ
ば、むしろ君がひどくやられたるコは非ずやと存ぜい。
あの当時君は小生の先似オット失礼ニ小生のやり方
見た様なるをやられ居い様思ひ居い。その後右の評の要ヨ大
にけれ込まれて在る如調ヨなられい様変えい。アノ当時調
狂作などの選ばもかりて君し得意で有つたらしかがふとし感
るう小しく大変成り居い。君が右の和へ近ふみうんだう
ら品早先生は三言四言ことわどいはいば只君のやり
方を見ておられた様な見方で有つた様ナ
然る事、狂作十首ニ至つては一般の進境とないこのまゝで

どしゝやられいは、天下敵なしまいはんれしし績
狂作十首を拝見したく在居い狂作十首ニ至りて初めて長
拝梅茅君なるもの、調ヨ百を拝見初たる訳ない。去りな
ぶらやはり神楽俗国楽を参酌したもの、ヨ一百れば
（梅茅君なるもの、実の本調ヨは未だ達せるとたのしみ
居い

狂作十首調（考）はすべて気ヨ入らざい只十ナの
いなだきをねからにそり　そりいふみいたし泣くヨや
渋ひるや木でのこはもや　竹で拭はもや　さらくた
利鎌にメリて芦でのごはも
のうた十首中の秀逸ヒなるこれは勘向し調しまことにお
もしろくない竹で辺かど、俗語を入れてもうまく調和のと
れてみる処さすがはを感心化い

（本郷三丁目）

沼ようきは和四の

やらぬがいゝと存にやられ　そしてだしようつかれた男
の事をいふのかと思ふとそうぢやない――つまり面と

（本郷三丁目）

汐よきは第四の

砥刈くにぎかーたに　芒刈るをとめ　なの刈らせこそ

春野の雑子　あすからは　かくれて生けむや　あはむや

紐を

ふかーかーサと鼓ありい　第二句芒はカヤとよまするか（スキ）

其ともに字の通りすいまかるか　すいは涙をわるくする

やけりかやとよまずねらんかとひとりぎめをまあたれど

この句の上に何とか五字をおきたい　スヽキ刈りカヤ刈る

少世でしいい　それでもいいと仮たが涙をかわ見らぬ様な

爭わいたしい　これだけの鼓まで　つまりは出来よ

き方をい

其辺を第二の

おほ寺の板がうれにこの実をばとりてはまひと云々

のうたかあ　而しき著ねるい　涙もよくい　まれと結

句で打ちこは　車い

母かよぐと　この実はみ　おりてしこぬや　父がよ

はいおりや

のム印の句今一度思ひきつたゑびれたるをちひたかつ

たと思ひい　母といひ父といふ　あすり平れとあい　むーろ

父かすばしおりや　の句なくともよき様思ひ申い　コマリタル子連

れ三首のみとり立てい上仕とあい　あとのセツのとらぬ

理由は　（位）

その一句とりくあるを能にちれず　まれと換てたくてなし

そのミを柄つまらうなし初の並へ方しいかいとあい

その五首のはかし　そのまくとも思はれる　そうでないは

しろ　よく文のを実は歌として價値ありや否やとあい

（本紙二五字屋）

その六興のケツをたいいてるがまま小る之その為た一こ

三四と十五の歌をよみ力小方な仮に小巻入いへども　あま

もーろくねいケツて　かと、俗語を入れてもうまく涙和のと

れてみる処さすがは　と感へ化い

（本紙二五字屋）

その六、鯉のケツをたいてるが手本なる之の為た一こ
三四と十五のあをよみ方不たる技倆小巻入いへども あま
り技巧を過ぎていやまい
その七、椿庵の椿をつらまへてそれをねつてこいとはコレ
もその六の数を数へて技巧を弄したるまでのるふとならば
ヤタノ田ヲカリ〳〵ノ流ブ　スハノ森鳥々ノトブ
葛背西ニ延セオニ　膳部ツカヘマツルト　下リテ
来又カモカリ〳〵ノ友
と笑似したくなる
その八、はあまり事実に重きを置きて調子だ不たる気味あ
りねそ不ならねる点はよりかといふた郷の諸稗あまりに
面白くもなしと申よりかねくい
その九、ねか諷刺めきたるの様思はれて気持よからぬ
カかうサイバうちどの諷刺めきたるは已にいけもふりて
夕のヨかナふにからぬるもありそれをアンデなつたふ
コウそふるの狐たのだらふといろ〳〵と侍るを見そ
面白はなつてまるものまい　当を流するならば当
と諷し様かくでしい
かく短くせは付けたるもの、面白さの老えたるの方を歌
まする技倆は点を置いて他のあるまい　此の上で満腔の同
情を居るよせて点の健在を祝してそしては近作をねえす
るのを待ちきく点つてみるはかりなり
以上をくりかへし申すば
狂伝十首の趣向概して事実
とふる

調子の出の処多くは五七五七と出てゐるそして今迄の点

狂作十首の題詞概して事実を捏造せるはあらざるやと思ふ

調べの出の処多くは五七五七と出てゐるそして今迄の歌
かゝり来つた風と大なる差がないよう　又調子がおそ
気のいらめる
いつそ狂作と銘をうつ位ならばまちまちと風がはりの調子
をやつて見たらどうかとおもふ

枇杷の
相ゐ花　枇杷の花　ザクロノ花モサク
はた一ノ柿ノ花　栗ノハナモサク
はどう思ひなされいやと銘かゝ様を出かけ置き小
もはゝ　はもくれなりいコレニテおめんなさて
今月の歌会うは以上をもの久さまそいろ〳〵は近ふり
ゑ右及び　かしこ

秀次郎

三月六日午前一時十分

長塚梅廿子様

（本紙二五丁）

三月六日午前一四十分

長塚梅廿詞兄

秀治丁

下総国石下局配

岡田村

長塚節様

三月一百年前迄

東京日暮里花見寺内

香取秀治

暑い〻とふるに立れは四
時のとあれい まりなら今日の
弱岩忍ひやう水の
ムしくは高はゆ山へ出かけ
はたらくや 為
別段のものもなし此頃
已に九月末尾は批評とて
もらひものの
半月のはゝ沒も何ひ
には批評ばかりの 閑短
そんなに あちこちと見せまは
れるものゝおいはゝ 生の
わるさ批評もしるすべく
とちがつ

東京日華花月時
香雨香の会

あちこちと見せまはる
私めものあはひはやゞ生半の
わるさ文批評もし給すべく
とあれは句論　存ぶんまん
七八首作りしものなれば
生半不出来手たかはらず
折見つかけれは御手はる
やはらかにるあらく
別紙へ直ちに朱書して批正とよ
ふかあまんたる返るはけかた
この辺の作意（アルビ）　歌は少し
になりしかいかし　批評のは
どう存へても感心出来ずれ
されど　さすが目のけれの
えらきことを感し出れ
海底問答　石仏主の評は
大にちがすきは　いか西清の
ホッヤリおとし見る等ねがいたしい

海底問答　たゞ美玉の評は
大に書ぶ者は
ホンやりなと尽るを
必に角方体とし
心なの吾精神あ　至一稜の
哲理をふくみた　るは書ふ
もの問答を訪ひ　来問
見をもらはれ　とふ法を
きいに答る　るは風説の
ふ　きいに答へ　次のなき事に

問はたゞとこそきいへ

日ごろの少年ばの稽古先

叮嚀に人やけばこそ

大地に火のあれそこそ
とまの京ふけうとくるなめ
沸る山にすりはれ
ちりだめにたねもこの
定まかたしねれば
事は遠けめ
松は　せへめ
たねもに　るもに朝日の
松の　草に　ねもに

翼　音　問　問　の　歌

翠嵐園調の歌

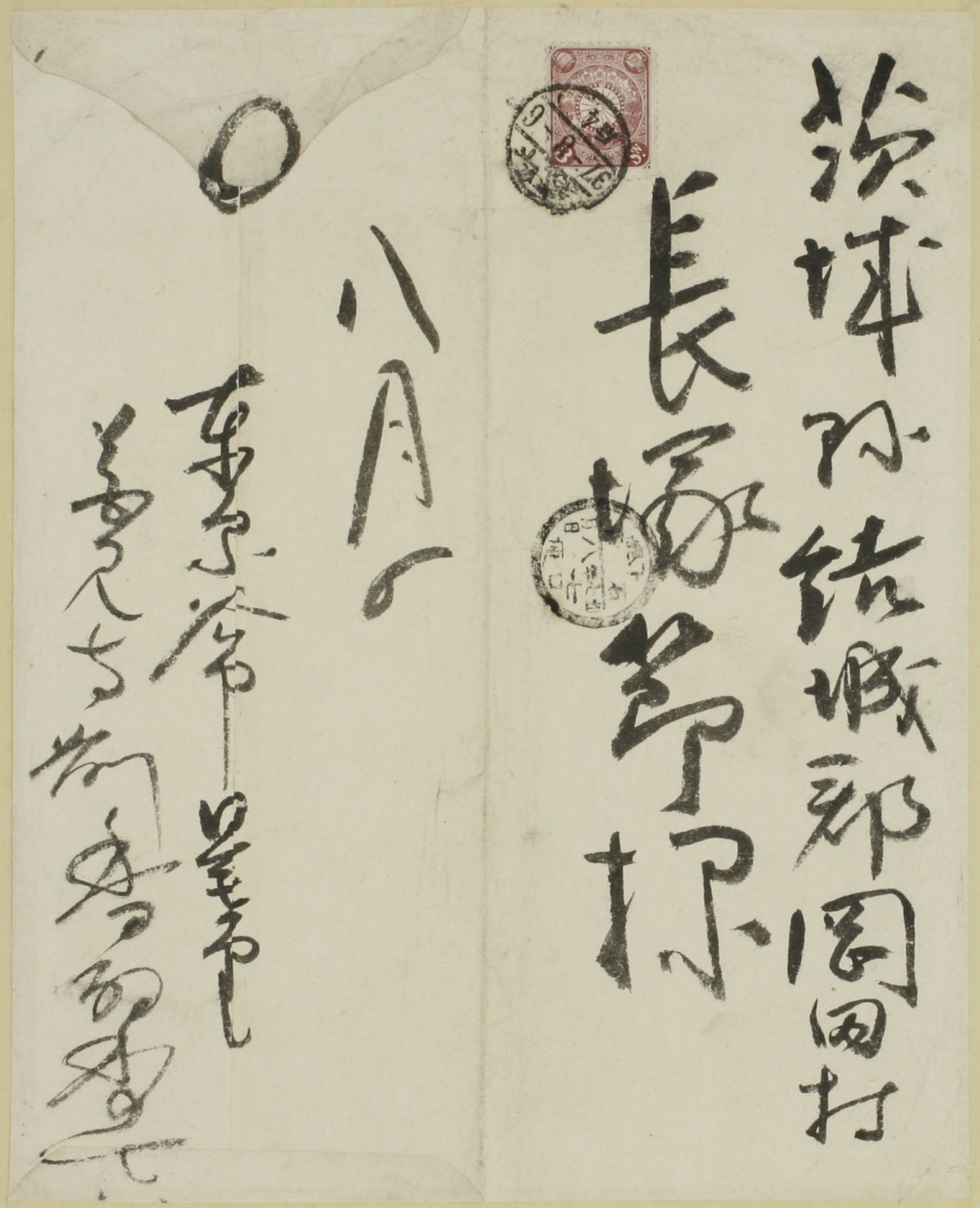
大地に火のあれそこそ
叫び人やけばこそ
とゝまの原ゆゝとくゝ
消る山にたりはぶれ
ちりだめにたねあれはこそ
定まかたねあれはこそ
市仙は送けめ
松は
たねをまけ
茅に
茅が身たゝめやは

八月六日

秋の夜ぶ

土塚節子君

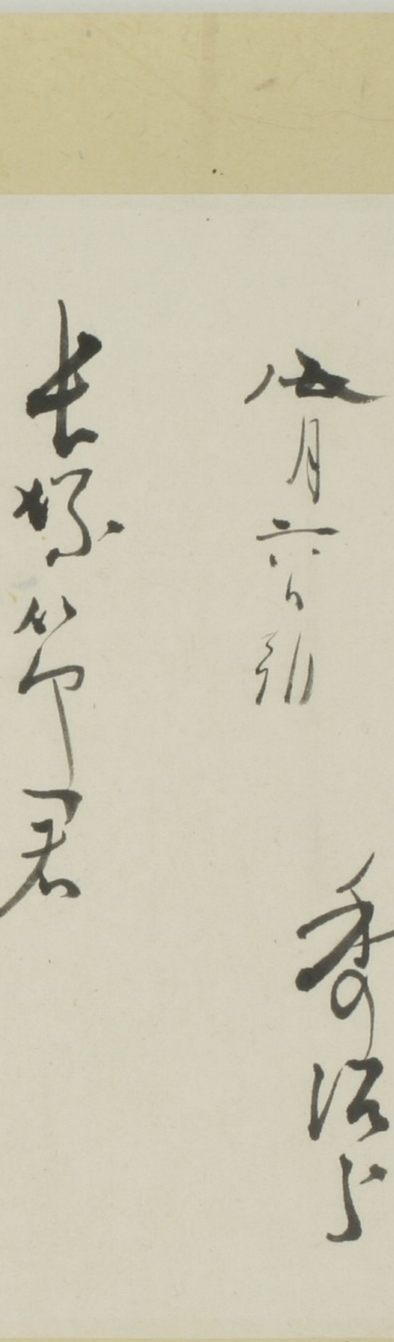
ものゝ
畑はたゞとこそまゝい火のあまゝ
日ゝ



茨城郡岡田村
長塚節様

八月六

東京谷中
美人竹秀雅



八月六日

東京谷中
長塚節君

秀雅